
とろけるチョコをあなたに

天沢祐理架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とろけるチョコをあなたに

【Nコード】

N4521L

【作者名】

天沢祐理架

【あらすじ】

どうか今だけ感じて欲しい
伝え切れないこの想い

胸の内にある

秘めた想いを乗せて

君に捧げる

甘くとろけるチョコレート

・* : ◦ . ◦ . : * ◦ . * . * : ◦ . ◦ . : * .

純愛バトラー

バレンタイン編

本編未読のあなたもどうぞ

・* : ◦ . ◦ . : * ◦ . * . * : ◦ . ◦ . : * .

Ⅰ．たまにはデート気分

年明けの喧騒もだいぶ落ちつき、街のショッピングモールにはラッピングされたチョコレートが所狭しと並んでいる。

オレは二月の半ば頃にあった行事を思い出し、溜息を一つついた。「陣。どうしたのだ。浮かない顔をして」

名前を呼ばれ、視線をチョコレートから手を繋いで隣を歩いている少女に移す。いつもは凜とした光を放っている絵理の黒い双眸が心配そうにオレを見上げている。不覚にも頬が紅潮していくのが自分でも解った。

「いや別に。そろそろバレンタインの季節だなーと思っただけだ」赤くなった顔を彼女から逸らしながらそう答えると、絵理は納得したようにふむ、と一つ頷いた。

「確かに、二月十四日は血塗られた日だからな。バレンタインデーの由来になったとされる西暦二六九年のバレンタイン司祭の処刑に、一九二九年にシカゴで起きた血のバレンタイン事件。」

最近の出来事では一九九二年の清瀬市警察官殺害事件もこの日だったか。

そんな日の事をふと思いついてしまったら、そなたが溜息をつきなくなるのも解ろうというものだ」

いやお前解ってないから。

思わず喉元まで出かけた言葉をオレは慌てて飲み込んだ。バレンタインといえばチョコレートなどという乙女回路をこの女に求めるのは無謀以外の何物でもない。

紅潮した頬が急速に元に戻るのを感じたが、それはそれで都合が良かった。

手を繋いでショッピングモールを歩く姿は傍から見れば恋人同士

に見えるだろうが、オレと絵理の関係はそんなにロマンチックなものではないのである。

彼女は御剣財閥の後取り娘でオレは一介の執事。手を繋いでいるのははぐれない為だけだ。少なくとも彼女はそう思っている。

本当は手を繋ぎたいだけの方便なのだが、世間知らずな絵理はそういうものだとな得していた。

街へと散策に出るのは絵理の数少ない気晴らしだった。そのお供を仰せつかる時には、こうしてささやかなデート気分が味わえる。

誰に迷惑をかけているわけでもないし、この位の役得は許して欲しいものだ。

「そう言われてみれば今はチョココレートのセール期間中なのか？どこを見ても特設コーナーが儲けられておる」

さすがの絵理もこれだけ大々的にチョココレートコーナーが儲けられている事には気がついたらしい。興味を示したようで、絵理の足は自然とチョコ売り場へと向かった。オレもそれに続く。

「ああ、バレンタインにはチョココレートを贈る習慣があるからな。そのプレゼント用だろ」

「ほう。そんな習慣があるのか。確かに、贈答用に相応しいラッピングが施されているものが多数あるな……。むむ」

絵理が目を止めたのは手作りチョコのコーナーだった。『大切な彼に心のこもった手作りチョコを贈ろう！』という売り出し文句のポップ広告が張り出され、手作りチョココレートの材料となる素材や器具、ラッピング用の袋が並んでいる。

ポップの見出しの下には手作りチョコを贈る意義が書かれており、絵理は真剣にその広告を見ていた。

なんつーか、嫌な予感がひしひしとするんですが……。

「……陣。もしかすると、バレンタインに贈るチョコというのは手作りが推奨されるのか？」

予感的中。

「……いや、そういう訳でもないだろ。無理して作るよりも市販の

「チョコの方が美味しいと思うけどな」

「ふむ」

「ま、バレンタインなんてまだ先だろ。二月に入ってから考えたっていいんじゃないの」

「むう……。そうか」

オレは踵を返すと絵理の手を引いてチョコレートコーナーから離れた。絵理は大人しくオレについてきたが、彼女にしては珍しく、たびたびチョコレートコーナーを振り返っていた。

この事がきっかけで後々オレはとんでもない苦労に見舞われるのだが、この時はそれを予測できるほど頭が回っていなかった。

II. 執事のユウウツ

二月に入り、3-Aの教室ではあちらこちらで女子達がバレンタインの話題に花を咲かせている。別に聞き耳を立てている訳ではないのだが、甲高い声というのは嫌でも耳に入ってくる。義理チョコは何人にあげるとか、本命には手作りチョコを渡すとか、そんな話ばかりだった。

受験生とはいえセンター試験も終わり、後は期末テストだけなので皆気楽なものだ。

昔からバレンタインには幾度となくチョコを貰ってきたオレだったが、手作りチョコというものはあまり好きではなかった。むしろ苦手と言っている。

心がこもっているようだが何だろうが、素人が作ったチョコの味なんてたかが知れているし、中には物騒なものを混ぜ込んでくる輩もいる。

中学の時だったか、手作りチョコを食って腹を壊した事があった。後で人づてに聞いた話だが、どうやらチョコの中に愛用のコロロンが混ざっていたそう。

両想いになれるまじないだか何だか知らないが、そんな物騒なもの

ノを贈る事に疑問は感じなかつたのだろうか。

とはいえ、贈り物を無碍に断つて印象を悪くするのも得策ではないし、モテているという実感はそれはそれで気分がいいものだった。少なくとも昔のオレにとつては。なので貰える物は貰い、市販品は母への土産にして、手作りの品は人知れず処分してしまっていた。

非道い男と言うなかれ。恋にかける女の情念というのは恐ろしく、適度な距離を保っていないと面倒な事になる。

バレンタインが来ると幾分憂鬱な気分になるのも、この情念を様々な形でぶつけられるからだった。贅沢な悩みだと言われればそれまでだが。

それに、そんな想いをぶつけてこられて嬉しい相手など、今はたつた一人しかいないのだ。

そして、そのたつた一人から想いをぶつけられる可能性なんて皆無に等しい。こうした事情も相まって、バレンタインの話題を耳にするたびに溜息が出てくるのだった。

「溜息をつくると幸せが逃げるって言うけど、今日だけで一体どれだけの幸せを逃したのかしらねえ。あんまり辛気臭い顔をしているとそのうちカビが生えるわよ」

からかうようにオレに話しかけてきたのは隣の席の伊勢村千沙子。気が強そうだが整った顔立ちに唐茶色の腰まで届く長い髪。細身なのに出来るところは出ているという素晴らしいプロポーションの持ち主でもあった。

「うるさい」

面倒になつて投げやりな返事をしたが、千沙子は意に介さずに椅子ごと体をオレのほうに向けた。

「元恋人に対して随分な返事だこと。まったく、その姿をキヤーキヤーあなたに群がる女どもに見せてあげたいわ。

知ってる？ あなたがフリーなのをいい事に、生意気にも告白を目論んでる輩の多いこと。さぞかし大変でしょうけど、せいぜい頑張ってね。オホホホホ」

愉快そうに不吉な予言をした千沙子は声を上げて笑った。

夏の沖繩旅行以来オレに対する態度がだんだん酷くなっている気がする。飾らなくなっただのは結構な事だが、もう少しいたわりの心というものを持って欲しいものだ。

「お前、追いつちかけて楽しいか？ ただでさえバレンタインの話がそこらじゅうから聞こえてきて憂鬱だつてのに」

「あら、そのせいでユウウツだったの。」

さぞかしおモテになるから、楽しみなのかと思っていたわ」

「オレが面倒事が嫌いなもの知ってるくせによく言つよ」

「面倒事、ねえ。ふふ」

無然とした顔で返すオレに、千沙子はまた声を出して笑った。さつきとは違う柔らかい笑み。からかいを含んだ口調は消えていた。

「そのセリフを聞いて安心したわ。御剣さんはともかく、他の女にまでデレデレしてる姿は正直見たくないもの」

からかってごめんなさいね、と素直に謝られてオレは一瞬言葉に詰まった。

「ま、今は逆チョコなんていうのも流行ってるみたいだし、受身一辺倒っていうのもナンセンスなんじゃないかしらね」

「何が言いたい」

「そんな辛気臭い顔で溜息なんかついてるよりも、あげる側に回ってみたらって言ってるの。あ、もちろん私にも忘れずにね」

「ちやつかり催促かよ。ま、考えとく」

あげる側、か。貰えるとか貰えないとか、そんな事でうだうだ悩むよりも自分で行動を起こした方がいいよな。

オレの溜息の理由など、千沙子にはお見通しだったという訳だ。最初にからかわれた苛立ちと心の内を見透かされた気恥ずかしさでぶつきらばうな返答になっちゃったが、千沙子のおかげで吹っ切れたような気がする。

千沙子がオレの返事に対してにやりと笑ってみせると、丁度授業時間を告げるチャイムが鳴った。

III・届かぬ想い

放課後になり、絵理を1 Aの教室へと迎えに行った。まだ残っている生徒は既にまばらで教室は閑散としていた。

絵理は楽しそうに隣の席の男と話をしている。細身で美女と見紛うほど顔立ちが整っているから、男だと判別できたのは制服のおかげだった。もつとも、今ではよく知った仲なので間違えることはないのだが。

「絵理さん、迎えが来たみたいけど」

「む。そうか。青司、いつもつき合わせてしまって申し訳ない」

「いや、俺が好きで一緒に待ってるんだし。バイトまで暇だったからね」

こちらから声をかける前に、絵理と青司のそんな会話が聞こえてきた。

……相変わらず仲が宜しい事だ。

絵理と青司は恋人同士だから仲がいいのは当たり前といえば当たり前だが、その様子を目の当たりにするのはいつになっても慣れないものだった。

絵理はわざわざ教室まで迎えに来させるという過保護な扱いは元々望んでいなかった。だが春にトラブルに巻き込まれて以来、生徒会のない日は絶対に教室で待っているようにオレが約束させたのだ。その頃はまさか絵理に恋人が出来るなんて考えてもいなかったし、オレが本当に彼女に好意を持ってしまふ事になるとは夢にも思わなかったわけだ。

自分がさせた約束が原因で毎日毎日自分の感情を持て余す事になるうとは。つくづく昔のオレは阿呆である。

絵理はそんなオレの感情など露知らず、青司と二人連れ立ってオレのほうにやってきた。一緒にいることが当り前の空気が二人の間に来上がつている。この二人が表立っていちゃついているところな

んて見たことがないし、交わされている会話もパソコンで行っているチャットのログも恋人同士特有の甘い会話なんて一つもない。それでいてこと恋愛に関して他人が入り込む余地など全く感じさせない。

その事が悔しくて、苛立たしくて、悲しかった。

この後は三人で一緒に校門まで行って、そこで青司と別れるというのがお決まりのパターンだった。無言で歩いてるわけではないので、移動している間にも取り留めのない雑談を交わしているわけなのだが。

「ところで青司よ。そなたは甘いものは好きか？」

「甘いものか……。冷蔵庫が空のときはブドウ糖をなめて飢えをしのいでいたなあ」

「わざわざそんなもん買う金があったら普通に食料買えよ！」

「バイト先の先輩から貰ったんですよ。プロテインとセットで」

確かこいつのバイト先は駅前の執事喫茶だったはずだ。以前絵理に連れられて冷やかしに行った事があるが、小洒落た店員のイメージとボディビルダーを連想させるサプリメントの組み合わせになんともいえない違和感を感じた。

「……そういう事ではなくて、好きかどうかを聞いている。その、例えば、ちょ、ちょこれーとは食べたりますのか？」

後半の言葉はしどろもどろになり、チョコレートに至っては声が裏返っている。何を意図した質問かは明白だった。

「チョコは好きだよ。イライラしている時に食べると落ち着く気がするし」

挙動不審な絵理に全く言及せず、いつもの調子で青司は答えた。

何かあるとすかさず突っ込んだりいじったりするのがこいつの習性なのにこの反応は明らかにおかしい。外国暮らしが長かったとはいえ、絵理のように日本のバレンタインの慣習を知らないというのも考えられない。

単に関心がないだけなのか、絵理の意図を汲んで素知らぬふりを

しているのか。どちらにせよ、余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）で羨ましい限りだ。

「そ、そうか。確かにチョコレートは栄養価も高く、コンバットレーションにも同封されているくらいだからな。遭難してもチョコレートのおかげで生き延びたという話も聞くし……。まあその、なんだ。あれは良いものだ。うむ」

「レーションといえばアメリカのは食べたもんじゃなかったなあ。でもチョコだけはうまかった。日本でも普通に市販されているんじゃないかな」

「ああ、あの口内で溶けても体温では溶けない、という売出し文句のマーブルチョコレートか。私も食べた事があるが、糖分補給に丁度良かったな」

何でそこで軍用野戦食や遭難の話になるのか。というか、何で青司はそんなもの食ったことがあるんだ。この二人の会話は放っておくとどんどん殺伐とした方面へ転がっていく。

絵理から聞く限り二人きりの時でも同じような調子らしい。この殺伐とした会話が絵理と青司なりの二人の世界の構築の仕方なのだろう。

この二人を見ていると、羨ましいと思う気持ちとこんな殺伐とした恋人同士になるのは嫌だと思っ気持ち複雑に絡み合い、嫉妬すら満足にできないのだった。

Ⅴ．彼女のヒミツ

青司と別れ、迎えに来た高級車に乗り込んで帰路に就いた。絵理は何だかそわそわして落ち着きがない。屋敷に着くとそそくさと自分の離れに引っ込み、机の上に置いてあった箱の中身を確認し始めた。

明らかに様子がおかしい。

「絵理サマ。何をしていらっしやるんですか？」

オレが絵理の背後から声をかけると、彼女は文字通り飛び上がった。その動きがあまりにも小動物的で型通りだった為、思わず嘖き出してしまいそうになった。

だか狼狽したのも束の間、絵理は勢いよくこちらを振り向きざまに言い放った。

「おのれ何奴！」

お前は襲撃を受けた武芸者か。

「何奴と言われても。この離れに常駐してるのはオレくらいしかないだろ。」

なあ絵理、お前さつきからおかしいぞ。目は泳いでいるし挙動不審だし」

「きよ、挙動不審とは何事か！」

私はいつも通りだ。陣こそ、背後から気配を消して忍び寄り一体何をするつもりだったのだ！」

世が世なら振り向きざまに切り捨てられても文句は言えぬのだぞ」
絵理の時代錯誤な発言はいつもの事なのでこの際気にしないことにして。問題は一体何故彼女はこんなにも平静を失っているかという事だった。

絵理は机の上の箱を背中で隠すような格好でオレを睨んでいる。顔が真っ赤になっているのは驚かされた恥ずかしさのせいだろうか。

「で、その後ろに隠してるものは一体何なんだ」

「う……。気にするな」

「お前なあ。その発言は気にしてくれと言っていろいろなものもんだぞ。まさか、闇ルートからやばい物でも取り寄せたんじゃないだろうな」
「私がそのような事をするわけがなかるう！　これはれっきとした合法品だ！」

「じゃあ見ても問題ないよな？」

「いや……。それはその……。プライバシーの侵害に当たるから残念だがお引取り願おう」

プライバシーとききましたか。そう言われるとますます気になる。オレは絵理に近付くと、肩越しに後ろの箱を覗き込んだ。

「こ、こら！ 勝手に見るでない！」

絵理は慌てて箱の蓋を閉めようとして手を滑らせ、箱が机の上から床へ逆さまに落ちた。

箱から飛び出してきたのは大量の高級チョコレート。ラッピングされたものではなく、製菓用のチョコレートだった。

チョコレートに紛れて『NAPOLEON』と銘打ったブランドの瓶も転がり出てきた。

……これって確か五万円位する酒だったような。

絵理は慌ててチョコレートをかき集め、ナポレオンの瓶を掴んであたふたと箱にしまいこんだ。

絵理は息をつくとき、オレに向き直り、厳かに告げた。

「見られてしまったからには仕方がない。陣。この事は他言無用ぞ」

「……たかがチョコで一体何を深刻になってるのか知らんが、別に言いふらしたりしねーよ。おおかた、バレンタインの手作り用だろ」

「……うむ」

絵理は顔を真っ赤にして小さく頷いた。いつもの物怖じしない彼女からは考えられないほどの可愛い仕草で、思わずオレまで赤面しそだった。

「しばし給湯室にこもって作業をする。私の作業が終わるまで、適当にくつろいでいてくれ」

言外に「お前は引っ込んでいろ」と言われてしまい、少々困ったが仕方がないので書齋の本でも読んでいることにした。

箱に入っていたベルギー製のクーベルチュールチョコレートは下準備が少々面倒だが、うまくできればそこの市販チョコなど軽く凌駕できる。

何故そんな事を知っているのかと言えば、まだ母が健在だった頃に店に出す洋菓子作りを手伝わされていたからだ。

特にバレンタインデーには来店した客に手作りチョコを茶菓子サ

ービスとして提供していたのだが、それが大変好評で毎年バレンタインデーになると母の経営している喫茶店は一日中満席状態だった。そんな状況で母一人で作ったのでは数が足りるはずもなく、オレもチョコ作りに狩り出されていたという訳だ。

そのおかげで基本的なチョコ菓子は大体作れるようになったし、わざわざ温度計を使わなくても下準備に最適な温度が解るようになってしまった。

バレンタインのチョコ菓子に限らず、人手が足りないときはオレが作った軽食やデザートも客に出したりしていたのだが、好評だったようなのでそれなりの味にはなっていたのだろう。

まあ、こんな環境で育ったせいもあって、素人の手作りチョコなんか貰っても有り難味よりも欠点の方が目に付いてしまうわけで。

特に中学の頃なんか一番調子付いて天狗になっていた時だから、あげる方の気持ちなんて全く考えていなかったわけ。

高校に入ってから貰ったチョコはみんな千沙子に没収されていたわけ。

結論。

あげる相手とあげる品はちゃんと選ぼう。

オレは悪くない。多分。

のんびんだらりと過去を思い出しながら書斎の本棚を眺めていると、給湯室から爆発音が聞こえた。

オレは身を翻すと慌てて給湯室に向かった。勢いよく引き戸を開けると、給湯室に充滿していた焦げ臭い煙がなだれ込んできた。

「絵理！ 大丈夫か！？」

「陣！？ こ、こら！ 入って来るでない！ くつろいでいるように言ったであろう！」

慌ててはいるが元氣な返事が返ってきて、オレはひとまず安心して。

改めて現場の状況を見ると、ガスコンロには焦げ付いてお釈迦になった鍋がそのまま置いてあり、電子レンジは煙を上げて昇天

している。爆発音は電子レンジが天に召された時の断末魔だろう。中を確認するとチヨコレートが入ったステンレスのボウルが不自然に端に寄せられた形で置いてあった。

鍋の内側には焦げ付いて油分が分離した無残なチヨコレートの残骸がこびりついている。

オレが絵理に向き直ると彼女はばつが悪そうに顔を逸らした。

……そう言われてみればオレは絵理が料理をしているところなど見たことがなかった。

「絵理、お前もしかして」

「黙れ！」

うん、とりあえず料理が壊滅的に苦手な事と、それに対して多大なコンプレックスがある事は解った。

「ま、怪我がなくて良かった。とりあえず換気して鍋片さないとなこんな状態じゃ作業できないだろ」

「……うむ……。そうだな」

恥ずかしさよりも現状を何とかしなければという思いが勝ったらしい。絵理は大きく息を吐くと焦げた鍋の片付けを始めた。

レンジからボウルを取り出して改めて中を見てみたが、どうやら完全に壊れてしまっているようだ。金属を電子レンジに入れても、余程の事がない限り爆発などしないのだが、偶然に偶然が重なってこのような惨事になったようだ。

直接的な原因は端に寄せた事でボウルとレンジの壁面が接触し、そこから火花が生じたせいだと思われた。

ボウルの中にはチヨコレートがほぼ溶けずに残っていた。金属はマイクロ波を遮断するし火花が飛ぶ危険もあるのでステンレスのボウルを電子レンジ調理に利用するのは愚の骨頂だ。しかし今それを指摘しても絵理をへこませるだけなので口には出さなかった。

「電子レンジはもうダメだな。後で新しいのを買ってくるか」

オレがそう言うのと絵理は肩を落として落胆した。やれやれと頭を振り、自嘲気味に呟く。

「まさかチョコレートで電子レンジで溶かすのがこれほど危険な行為とはな……。つくづく己の無知が嫌になる」

「いやその。それチョコじゃなくてボウルのせいだから」

「何!？」

「金属を電子レンジに入れると危険だって知らなかったのか？」

「それが……。電子レンジを使ったのはこれが初めてなのだ。説明書を探したのだが、見つからなかった。仕方がなく見よう見まねで使ったらこのざまだ。笑いたければ笑うがいい」

しよんぼりと肩を落としている絵理に追い討ちをかける気にはなれず、別の質問を試してみた。

「ところで絵理。チョコレートの作り方、ちゃんと知ってるのか？」

「溶かして再凝固させればよいと聞いた」

「……オーケー。まずはその認識から改めようか」

おおかた直火にかけて溶かそうとして失敗して、電子レンジで溶かす事を思いついたのだろう。

「その、もしかして陣は正式なチョコレートの作り方を知っているのか？」

「まあ、売り物に出来る程度の物は作れる」

その言葉を聞いて絵理は暫くオレの顔を凝視していたが、やがて意を決したようにこちらに向き直ると、いきなり床に手をついて頭を下げた。

「この御剣絵理、恥を忍んでそなたに頼み申し上げるっ！　どうか私に正式なチョコレートの作り方を教えてはくれまいか！　私にできることなら何でもする。だから、どうか!」

絵理の素っ頓狂な行動には耐性がついてきたつもりだったが、いきなり土下座されて思わず狼狽した。

困惑して頭を掻いた後、絵理を抱き起こしてその場に立たせた。

「んな大げさに頼まなかったって教えてやる。いつもみたいに言いつけてくれりゃいいんだよ。オレはお前の執事なんだから」

ベタな漫画とかだったらここらで交換条件を持ち出すんだろうけ

ど、そもそも何で絵理がこんなに必死になってるかといえば青司の為であつて。

ここで弱みに付け込んで絵理を表面的に自分のものにできたとしても、空しいだけなんだよな。

絵理は呆然とオレの顔を眺めていたが、突如オレの背中に腕を回して抱きついた。思わぬ行動に心臓が早鐘のように鳴り、全身が熱くなつていく。

背中に回した腕に一層力を込めた絵理はオレの胸に頬を寄せたまま沈痛な声で呟いた。

「不甲斐ない主ですまない。陣の心遣い、本当に感謝する。……ありがとう」

引き寄せられるようにオレの腕が絵理の背中に回され、黒絹の髪を撫でた。

身体の前面と腕から伝わる体温が全身を痺れさせ、彼女の事しか考えられなくなる。

まずい。このままだとチョコ作りどころじゃなくなってしまいうだ。

オレは残った理性をフル動員して絵理から離れた。

純粹は時としてひどく残酷だ。さっきの行為だつて、親愛と感謝以外の感情は伴ってないのだろう。そして、それに気がつかないふりをして自分の感情のままに突っ走る事ができるほど、オレは子供でも大人でもなかった。

「ま、料理が苦手な奴なんかそこらじゅうにいるさ。これから練習してできるようになつていけばいいだけだ」

「……そう言ってもらえて救われた気分だ。料理もできないくせに今まで主面まへをしていたのかと咎とがめられるのが怖かった。だが、真に恥ずべきはできない事を隠そうとした浅ましさだ。……その事に気が付けたのは陣のおかげだ」

全く、変なところで生真面目で変なところで大胆だからこっちは振り回されっぱなしだ。

「バーカ。お前は真面目すぎるんだよ」

茶化すように絵理の額をつついて、彼女に向かってニツと笑ってみせた。

「ば、馬鹿とは何だ！ さすがに言いすぎであろう！」

「はっはっは。悪い悪い」

「人が神妙な気持ちになっっている時に限ってここぞとばかりに茶化しおって！ そんなに私をからかうのが楽しいか！」

「ま、少なくとも落ち込んでる姿を見るよりは面白いなあと」

「……たわけ。別に落ち込んでなどおらぬわ」

絵理は口を尖らせてふくれっ面をした。いつもの調子に戻ったように何より。

無事なチョコレートを確認してみると、未開封のものが大量に残っていた。どうやら失敗を見越して多めに注文していたらしい。

幸い、焦がした鍋は一つだけだったので別の鍋を使えば作業ができそうだった。

「しかしなあ。そんなに苦手なら市販品でも良かったろうに。前にも言ったけど、下手な手作りよりも市販品の方が美味しいし、それでもいいと思うんだが」

調理器具を用意しながら、気になっていた事を絵理に尋ねてみた。ここまでコンプレックスを持っていながら、何故手作りチョコを渡そうなどという無謀な事をする気になったのだろう。

「……バレンタインというものは、恋人同士にとって特別なものと聞いたからだ。私は、青司に恋人らしい事が何一つできない。恋人らしい、というものがどういうものなのか、未だに理解できていないからな。

だから、せめて慣習という手本があるときくらいは恋人らしい事をしたかったのだ。

多分……んは……いから」

か細い声で付け加えられた絵理の言葉の最後の部分は断片的にか聞き取れなかった。

恋人らしくない、か。あれだけ隙のない空気を作り出しておきながらそんな風に思っているなんて、笑わせてくれる。

熱に浮かれているだけならば、幾らだつて奪える自信はあるのに。他の誰よりお前が好きだと、自信をもって言えるのに。

青司と一緒にいるお前を見ると、そんな想いもどこかに吹き飛んで、唯唯打ちひしがれるだけだなんて、おまえが知ったらどう思うのかな。

それでも恋人らしくないだなんて寝言が言えるんだらうか。

「で、青司にあげるチョコはどんなものを作る気だつたんだ？」

基本的な器具は出したものの、肝心の内容がわからないと作業に入れない。

一口に手作りチョコといつても様々な種類があるのだ。

「実は……。青司は洋酒が好きだから、中にブランデーの入ったチョコを作るつもりだつた」

ありえないチョコイスに思わずフィタ。

「よりによってブランデーボンボンかよ！

むちゃくちゃ難易度が高いんだぞそれ！」

難易度以前に未成年の飲酒は違法である。しかし、菓子に酒を使うのはよくあることだし、この際無粋な事は言つまい。

だが、いくら菓子作りに対して無知とはいえ、いきなり難易度の高いものを持つてくるとは……。てつきりベタな型抜きチョコかトリュフあたりだと思つたのに。

「もしかして、陣でも無理なのか？ それを作るのは」

「誰に向かつて無理と仰つているんですか絵理サマ」

無理と問われて闘争心に火がついた。

幾多の客を唸らせて来たオレの菓子作りの腕前をなめるなよ。

こつなつたらあの生意気な青司が平伏ひれふすような菓子を作ってやる。ククク、青司め。オレの目ごろの恨み妬み嫉みを思い知るがいい。

後で冷静になって考えるとかなり間違つた方向に思考が行つてるのだが、熱くなつた頭では気がつかない。

こうしてオレは腕によりをかけて恋敵に極上の菓子を作るといふ
妄執に取り付かれてしまったのだった。

？・仁義なきチヨコ作り

「んじゃ、早速始めようか。言つとくが、このオレに教わっておき
ながら無様なものを作ったら承知しないからな」

オレの宣言に絵理はゴクリと唾を飲み込んだ。一瞬怯んだように
見えたがすぐに瞳の輝きを取り戻す。

「元よりそのつもりだ。至らないところがあれば遠慮なく指摘して
欲しい」

なぜか絵理は『必勝』と書かれた鉢巻を取り出し、自分の額に巻
いた。おそらく気合を入れるためだろう。

「さあ、どこからでもかかってくるがいい！」

絵理は片手鍋とゴムベラをまるで二刀流の剣のように構えて気合
と共に言い放った。

かなり間違つた光景だが、今この場にはこれに突っ込む者は誰も
いない。

「いい覚悟だ。じゃあ、まずコーンスターチを取ってこい」

「へっ!？」

オレの口から出た言葉が予想外だったのか、絵理は虚を突かれて
固まった。

「料理長に頼んで分けてもらつてくればいいだろう」

「いや、しかし、何故コーンスターチなど」

「使うからに決まつてるだろうがヨオ！ オレが行つてもいいが、
その間に下準備やら何やら済ませられるのか？ ええ？」

「……できません」

素直で結構。

「じゃあ行つて来い。その間に下準備をしておいてやる」

「はいっ!」

絵理は片手鍋とゴムベラを装備したまま母屋の方へと駆け足で向かっていった。その間にオレはコーンスターチを敷き詰める型を準備する。この型というのは何でもよくて、コーンスターチを敷き詰められるなら何でもいいのだ。

タルト用の型があったのでそれを使うことにして、次はグラニュー糖、水飴、水の分量をそれぞれ量り、こちらに残っていた片手鍋に投入した。加熱するにはまだ早いのでそのままにしておく。

ブランデーを量ってボウルに入れ、後の手順で使う器具を全てそろえ、すぐに使えるように並べた。

冷却用の濡れ布巾を準備し終えたところで絵理が戻ってきた。

「取って参りましたッ！」

武術の稽古のときのノリなのか、完全に口調が敬語になっている。

「よし、じゃあそれをそのタルト型に敷き詰めて平らに慣らした後、低温のオーブンで湿気を飛ばすんだ。この作業をしつかりやらないと失敗するから気をつける」

「はいっ！」

オーブンが電子レンジと一体型でなかったことが幸いした。

元気よく返事をしたものの『低温のオーブンで加熱』というところで早くも絵理は躓いた。使い方が解らないらしい。

オーブンの使い方教えながら、コーンスターチの敷き詰められたタルト皿を加熱した。しばし時間がかかるので、その間に窪みを作る凸版を用意する。

絵理が用意した型抜きチヨコ用のハート型があったので、それを使って窪みを作った。

あまり大きなものだとは作業効率が悪くなるため使えないのだが、今回用意してあったものは幸いにも一口サイズ用のものだった。

さて、ここからが本番。さつき用意した糖類を110度まで熱し、ブランデーと混ぜ合わせなければならぬ。

火からおろしただけでは温度が上り続けてしまうので、濡れ布巾を使い鍋底の温度を低下させてやる必要があるのだ。

加熱を絵理に任せるのは無謀なので、説明しながら自分で作業をした。

「温度計がなかったが温度を見た目で判断する事などオレにとっては造作もない。」

火からおろし濡れ布巾で鍋底を冷やして鍋を絵理に手渡した。

「よし、これをブランデーと混ぜ合わせればいいのだな！」

なぜかずっと装備していたゴムベラを勢いよく振り上げた。よほどお気に入りなのだろうか。

「まさかとは思うが、それで混ぜる気じゃないだろうか」

「む。駄目なのか？」

「糖度つてのは繊細なモンなんだヨオ！ ゴムベラで攪拌なんぞしたら大失敗の元だボケェ！」

「申し訳ありませんッ！」

オレが活を入れると、絵理は縮こまって謝った。

「では、どうやって混ぜたら……」

「簡単だ。糖液を静かにボウルに移したら、またボウルから鍋に移すんだ。これを何回か繰り返せば自然に混ざる」

「畏まりました」

「んじゃ、やってみろ。静かに、だぞ」

「はい」

絵理は殊勝に頷くとおそろおそろ糖液をボウルに注いだ。移し終えただけで大量のエネルギーを消費したらしく、大きく息を吐いた。そしてまたブランデー入りの糖液を鍋に移し入れ、無言で息を止めたままこの作業を繰り返していた。

あんなにおっかなびっくりやる必要はないのだが、気を抜いて雑になってしまふよりはいいだろう。

混ぜ終わる頃には、絵理はすっかり消耗していた。

肩で息をつき、激しい組み手を終えた後のようになっている。極度の緊張状態のまま作業をしていたのだろう。

この後はこれを水差しに移し、さっき作ったコーンスターチの窪

みに流し入れ、上からもコーンスターチを茶漉しで振り掛けるだけだ。

注意してやらないと一気に糖液が流れ込んで型から溢れてしまうので、消耗しきった絵理には難しそうだ。

そんなわけでこの作業も自分で行い、絵理には仕上げの振り掛け作業を担当してもらう事にした。

……重要な部分はほぼオレがやってしまったような気がするがまあいいか。

これで作業はいったん終了。後は糖化するのをひたすら待つだけだ。

チョコでのコーティング作業はまた後日。バレンタインまでにはちゃんと間に合いそうだった。

「よし、これでひとまず終わり。後は寝る前に一度ひっくり返せば、朝にはもうできてるはずだ」

「……終わったの、か？」

「工程の半分つてところかな。明日学校から帰ったらテンパリングから何から全部教えてやる。ちゃんとマスターしろよ」

「電波リング？ 何だその奇怪な代物は」

「……テンパリング。意味は自分で調べろ」

「もしやそれがチョコ作りの秘訣なのだな。解った。明日の作業までにはきちんと調べておく」

ちなみに、テンパリングというのはチョコレートを温度調節して結晶を整え、口当たりを滑らかにする作業だ。これがうまくいっていないとざらついたり、口溶けの悪いチョコレートになってしまう。

ただ、これさえマスターしてしまえばデリケートなチョコ菓子も思いのまま。面倒な作業だが挑戦してみる価値はある。

正直、一度や二度でマスターできるほど簡単ではないのだが、意気込みというのは重要である。

予習を促した甲斐もあり、チョコを直火にかけて変質させるとい

う真似はもうやらなくなった。

微細な温度調節にはやはり四苦八苦していたが、これをあっさりクリアされてもオレの立つ瀬がない。

オレも直接手伝い、何度か繰り返し返してようやく満足のいくものが出てきた。多少時間はかかったが、スタートがレンジ爆発と鍋丸焦がしだということを考えたら、たった二日でよくここまで成長したものだ。

前日に作ったブランデーボンボンにテンパリングをしたチョココレートをコーティングして、完成。完璧なブランデーチョコボンボンが出来上がった。

後はラッピングして当日に渡すだけ。

絵理は出来上がったチョココレートを不思議そうに眺めていた。オレに手伝ってもらったとはいえ、自分で作ったという事実がまだ信じられないらしい。

「せっかくだし、味見してみるか？」

「……いいのか？」

「いいも何も、渡す前にちゃんと味見は必要だろ」

オレは苦笑して完成したばかりのチョコを一つ絵理に手渡した。

「……おいひい」

中に入っているブランデーのせいなのか、赤くなった顔で絵理は呟いた。

「陣も食べてみりゅといい。納得できりゅ味になっていりゅか判断してくりえ」

「どうやら絵理は酒には弱いらしい。未成年なのに酒豪だったらそれはそれで嫌だが。」

「大丈夫かよ。それっ回ってないぞ」

絵理は二人で作ったチョコを一つ、オレの口元まで持って来た。手では受け取らず、そのまま口で受け取った。

ハート型のチョコが口の中でほどけてアルコールの熱い味が広がる。

甘く甘く、熱い熱いチョコレート。
体が火照り、そのままとろけてしまいそうだ。

「……まあまあかな」

嘘である。

美味い。

めちやくちや美味い。

二人で作ったチョコだと思つと更に美味い。

青司なんぞにくれてやるのは惜しいが、そのために作ったのだから仕方あるまい。

オレと絵理の愛の結晶を食つて悶絶しやがれクククフフアハハハハハ。

「陣、何をそんなにニヤついているのら」

絵理が不審そうにこちらを見たが、そんな事は気にならないくらい気分が良かった。

「いや、やつぱり手作りのチョコは美味いなつて思つてね」

オレは数日前とは正反対の見解を述べ、幸せな気分のまま暫く絵理の顔を見つめていた。

? . Happy Valentine

今年のバレンタインは休日だ。案の定金曜にチョコレート爆撃があったが、義理チョコ以外はその場で受け取り拒否してしまった。

今のところあいつ以外には考えられないんだな、やつぱり。

千沙子には余ったチョコで作ったトリュフを渡しておいた。

包みを見て「いかにも義理つて感じね」とぼやいていたが、味に關しては文句がなかったようで、バレンタイン当日に美味かったとメールがあつた。

絵理は昼間は青司と出かけているので留守だった。いつもの如く二人で図書館に行くらしい。

そのおかげで心置きなく離れの給湯室を使えるわけなのだが……。

太陽が西の空に沈み始める頃、絵理が帰ってきた。

「よう。早かったな」

「中央図書館は五時で閉館なのだ。仕方がなかるう」

「ま、それでまっすぐ帰ってくるあたりがお前等らしいけどな」

「青司は今日もバイトだそうだ。休みのはずだったが急遽呼ばれたとかで」

「バイトねえ。こんな日までご苦労なこった」

そう言った後でオレも年中無休でバイトをやっていることに気がついた。

「そうそう、青司がチョコレートを絶賛していたぞ。これほど美味しいものは食べた事がないと。ふふ」

褒められてよほど嬉しかったのだろう。さつきから絵理の頬は緩みっぱなしだ。いつもの真面目な表情も捨てがたいが、やっぱり笑顔は可愛い。

「んじゃ、茶でも淹れてきてやるからそこで待ってる。疲れただろ」
「疲れはさほど感じていないが、茶は欲しいな。私はそなたの淹れた茶でなくては満足出来ないようになってしまったらしい」

絵理の期待に答えるべく、極上の紅茶を淹れて絵理の元に戻った。作りたてのチョコレートケーキを添えて。

形はベタなハート型。ただし、味は折り紙つきのガナツシユケーキ。

「む……。これは」

「チョコとブランデーが余ってたから作ったんだよ。ま、オレからお前へつてことで」

余ってたからなんてただの口実だ。元々オレはお前にありったけの想いを込めたチョコを贈るつもりだったから。

「……だが、私からあげるものがない。あれを作るだけで精一杯だった。……すまない」

申し訳なさそうに俯く絵理を見て、オレは思わず苦笑した。二人で一緒にチョコを作ったら、もう貰えるとか貰えないとか、そんな

事どうでもよくなつてしまつていた。

「前倒しで貰つたから気にするな。味見の時に前にお前に食わせてもらったチヨコ、美味かつたぞ。残されても困るし、遠慮すんな」

それでもまだ絵理は納得できないようで、しばし考え込んでいた。「そういうわけにもいくまい。……ではせめて、これを二人で食べよう」

そう言つて絵理はケーキを切り分けたが、皿もフォークも一つしかない。

「いや、気にしなくていいさ。皿とフォーク持つてくるの面倒だしな」

「全く……仕方のない奴だ」

絵理は深々と溜息をつき、ケーキを食べ始めた。一口食べた後で、小さく切り分けたケーキをフォークで刺し、オレの目の前に差し出した。

「横着者め。今回は仕方がないから食べさせるくらいの事はしてやる。……私からは用意できなかったしな」

予想外の展開に、オレは思わず固まつた。

「え、いや、でも」

「さつさと食べ」

言われるままに、差し出されたケーキを口に含んだ。妙に照れくさくて、肝心の味が何だか解らない。味見の段階では美味かつたはずだ。多分。

ただ解るのは、口に広がる甘さと熱さ。

ブランデーを使いすぎたせいなのか、顔の火照りが治まらない。んでもらっているせいなのか、顔の火照りが治まらない。

絵理はというと、そんなオレの動揺など素知らぬ顔で、ケーキの味を素直に絶賛していた。

こいつには敵わないな、と半分諦めながら、オレは再び差し出されたケーキの味を確かめた。

(後書き)

ここまで読んでくださり、有難うございました。
季節外れですが、バレンタイン短編です。

この話は本編6話の『Silent Night』と『流す涙は誰が
為に』の間のエピソードになります。

もし、こちらを先に読んで興味を持ってくださった方がいましたら
本編も覗いていただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4521/>

とろけるチョコをあなたに

2010年10月8日15時02分発行